

花と英文学

豊国 孝

スイセン（春）

北国に住む私にとって、雪に閉ざされた長い冬が終わり、春の到来ほど待ち遠しいものはない。春を告げる花といえば、クロッカス、チューリップ、すみれ、菜の花と色々あるが、衆人に愛されているのはスイセンの花ではないだろうか。木立の中や家々の庭で、可憐な黄色の花をつけるスイセン。暖かな春の日差しの中で楽しげに咲くスイセン。たそがれに「月夜のもや」のごとく、ひっそりと花を開くスイセン。スイセンは詩情と不思議なムードをもつ花なのだ。

スイセン（ナーシサス）の語源は麻酔剤、催眠剤（ナーコティック）に由来する。むかし、スイセンは人を麻痺させる力があると思われていた。人の心を魅了するこの花らしい語源といえよう。ギリシアの詩人が、水鏡に写る自分の美しい姿に恋い焦がれ、スイセンの花に化身してしまう美少年ナルキッソスを想像したのも無理からぬ話である。一方、ラッパズイセン（ダッフオディル）は古名アスフォディルの変形であり、交配による園芸種も多いといわれる。

以来、スイセンはイギリスの詩人たちの詩趣をそそることになる。シェイクスピアは『冬物語』の中で、「燕も飛ばぬうちに咲きだし、三月の風をうっとりさせるスイセン」と歌っている。ミルトンもギリシア神話のナルキッソスと、花に蜜を宿すスイセンとを結び合わせ、「スイセンは花の盃に涙を盛る」と「牧人リュシダス」という詩に書く。

十九世紀には、自然をこよなく愛したワーズワスが彼の詩「雲のごとく独りさまよいぬ」で、湖のほとりや林の中に咲き、そよ風に踊り揺らめく黄金色のラッパズイセンを詠じている。花を見ている詩人の「こころは喜びにあふれ、スイセンの花とともに踊っている」のである。

スイセンは詩人たちのみならず、小説家にも愛されてきた。アメリカの小説家フォークナーの初期のスケッチ風の短編「神の国」には、いつもスイセンの花を手で握りしめている白痴の男が登場する。

物語の背景は、禁酒法がしかれていた1930年代のニューオーリンズの町である。やくざの兄とその相棒が密造酒を配っている間、白痴は置き忘れられた荷物のように車の中に座っている。酒を運ぶ手助けをしなかった彼は、相棒の男に殴られて、スイセンの花の茎が折れてしまう。白痴の異様な泣き声のせいで、無法者たちは警官に逮捕される。野次馬のしている中で、兄は花に添え木をして、弟のためにスイセンを直してやる。弟は泣くのを止め、見物人も一人二人と帰ってゆく。雨上がりの四月の空のように青く澄んだ白痴の目と、薄黄色のスイセンの花の対比が、この短編小説の詩情を盛り上げている。作者は神の国に入ることが許される人は、花を愛する白痴だけである、と述べているのではなかろうか。

日本ではあまり読まれていないのだが、イギリスのチェホフといわれる小説家 H. E. ベイツの作品に、「水仙色の空」という短編がある。つぎにそのあら筋を述べてみよう。

中年の男性がかって恋人と暮らしていた町に、十数年ぶりにやって来る。季節は春で、雨が降ったり日がさしたりしている。町のたたずまいは変わってしまい、彼が近道をするため渡った歩道橋も今は閉鎖されている。彼はむかしよくいったパブに入るが、中の様子もすっかり変わってし

まい、バーテンも知らない若い男である。実は、この店はかつて主人公が恋人のコーラと初めて会った思い出の場所であり、その時彼はラップズイセンを売りに、市場にゆくところであった。

ストーリーは現在と過去が巧みに交錯しながら進んでゆく。男とコーラは親しくなり、やがて二人は婚約する。男と一緒に働いている老農夫が、農場を彼に譲るといふ話がもちあがり、男の未来は幸せと希望にみちてバラ色に輝いていた。しかし、農場を買う資金は二人の持っている金では足りず、コーラは知り合いのフランキーという男から金を借りることになる。はげしい嫉妬にかられた主人公は犬を散歩させていたフランキーを誤って殺してしまう。

今、男は刑期を終えて、コーラに会いに町にやって来ているのだ。彼はコーラの家を訪ねるが、彼女は不在で、コーラと男との間に生まれた娘と出会い、話をする。容貌も声も気質も母親そっくりの娘に、素性を隠している彼の心はあやしく乱れる。

物語は美しい水仙色の空が、駅の操車場の彼方に広がっているシーンで終わるのだが、それも男が初めて女に出会ったむかしとまったく同じである。恋人に会うきっかけとなったラップズイセンの花、彼の手にしみついた花の香り、そして雨に洗われたような水仙色の空は、この短編の詩情とムードを高めると同時に、男の喜びと悲しみをみごとに表現したといえよう。

思いつくままに、英米の文学に描かれたスイセンについて書いてみたが、ちなみに花言葉は、スイセンは我欲とうぬぼれ、ラップズイセンが報われぬ恋、片思いとあまりかんばしくない。雪がひらひらと降る冬の一晩に、スイセンを夢想する私には、詩人シェリーではないが、「花々のうち、いと麗しきスイセン」なのだ。

バラ（夏）

夏の花といえば、やはりバラにつきるといえよう。絵の好きな私は、画題にバラを選ぶことが多い。それはバラのもつ華麗さ、繊細さ、豊かな色彩感、ボリューム感などを気に入っているからである。古今東西の画家たちが、競ってこの花を描いてきた。なかでもフランスの画家ルノワールの美しく生命力に溢れるバラには、脱帽するほかない。

バラの栽培の歴史は古く、アジア西部やアフリカ北東部では、この花は五千年も前から知られていたという。野性種を初めて栽培したのは北部ペルシアであり、そこからメソポタミアへ、パレスチナを経由し小アジアへ、さらにギリシアに渡ったということである。まさにバラは世界各国で愛されている花であり、「・・バラ」と名付けられる名称は6,150種にもなるという。花言葉は愛情である。

バラは絵画や音楽のみならず、文学と縁の深い花であり、バラにまつわる伝説も多い。ペルシアの詩人は、バラとナイチンゲールの話を歌っている。ナイチンゲールはバラが大好きで、たえずその周りを飛び回っていた。ある時他の鳥がナイチンゲールのあまりにも悲しげな声に、夜も眠れないとソロモン王に訴えた。王はこの鳥を呼び出したが、花を熱愛している小鳥の心情を哀れんで、無罪にしたという。この伝説にちなんで、イギリスの十九世紀の詩人バイロンは「夜もすがらバラに歌うは、見えなくとも遠からぬ一羽の小鳥」と詠じた。

ギリシア・ローマ神話では、バラはもと美しいニンフで、太陽神アポロンの口づけで、眠りより覚め、バラに姿を変えたという。また一説では、ある朝花の女神が森を散歩していると、美しいニンフの亡骸が目についた。女神はニンフのあまりの美しさに、彼女を花に変えようと思ひ、神々に助けを求めた。美の女神アプロディーテーは美を、美の三女神は光輝、喜び、魅力を、酒神ディオニュソスは甘い蜜と芳香を授けたと伝えられている。

キリスト教伝説では、美の女神とバラのゆかりが、そのまま受け継がれた。聖母マリアが昇天したあと、その墓にバラと百合がいっぱいに咲いたといわれる。また、キリストの茨の冠から滴った鮮血が赤いバラになったという話もある。

イギリスの詩人たちもバラを愛してきた。シェイクスピアは有名なソネット五十四番で、「バラは美しいが、その花のなかの芳香ゆえ、より美しく思える」と賛美する。エドモンド・スペンサーも「赤い花に包まれた棘ある腕を広げ、あたりにふくいくたる香りをこめる野バラ」と詠じた。十八世紀の詩人ロバート・バーンズは「ぼくの恋人は、六月に新たに咲いた赤い赤いバラのよう」と歌った。

ロマン派の詩人シェリーは「ねむり草」の中で「まさにゆあみせんとするニンフのごとく、バラは生命みなぎる胸の深みをあらわし、うっとりせしそよ風に、一ひら一ひら美と愛の魂をあらわにする」と、バラを官能的に歌いあげる。アイルランドの近代詩人イエイツも詩集『バラ』の詩「時の十字架の上のバラ」で、「ぼくの生涯の赤いバラ、誇りのバラ、悲哀のバラよ」と、また「戦いのバラ」でも「このうえなく美しいバラよ、この世のバラよ」とバラへの憧れを歌っている。イエイツにとって、バラは神秘的信仰のシンボルであり、「完全なるもの」の象徴でもある。彼は現実には枯れてしまう悲しい境遇にあるバラを、不滅の精神的美として歌っているのだ。バラこそ花の中の王であるという、詩人で小説家の D. H. ロレンスは「全世界のバラ」という詩で「花よ、わたしの可愛い花よ、人から叱られることもなく、目的というものを持たないバラの中のバラであってくれ」と書いている。

ロレンスの短編に「バラ園の影」という作品がある。物語は、新婚の若い夫婦が海辺の町に遊びに来るところから始まる。妻は夫に内緒で、かつて初恋の男とデートをした思い出のバラ園に出掛けてゆく。色とりどりのバラが花を開いているバラ園。むかしのままに美しくロマンチックなバラ園。その中を歩く女は、自分がバラの花と同化し、バラになったように心が浮き立つ。ここで偶然に出会った恋人は、今は精神に異常をきたし、彼女が誰なのかも全く分からない。絶望した妻は夫に、自分の過去の恋を告白し、二人の間に深い溝ができてしまう。ヒロインは恋を恋する女であり、むかしの恋を捨てきれないのだ。紅バラや白バラが咲きみだれるバラ園は、彼女が求める精神的愛の象徴といえよう。それが皮肉にも、女を厳しい現実を目覚めさせるのである。

ロレンスの初期の傑作『息子と恋人』でも、恋人のミリアムが主人公ポールに森の中に咲く野バラの木を見せにゆくシーンがある。「象牙の浮き彫りのように、一面に大きな星を散らしたように、バラの花はこんもり繁った葉と幹と草とを一様に包む闇の中に輝いてた。」それを見ている二人は、魂にひそむ何かか燃えあがるような気がする。ミリアムの魂は震え、耐えきれなくなったように花に手をのばし、祈るように触れた。象牙色をして冷たい匂いがする白バラは、ヒロインの清浄さや処女性のシンボルであると同時に、彼女の精神性、抽象性、不毛性の象徴でもある。作者はバラを描くことで、見事にミリアムの本質を暴露しているといえる。

とりとめのない話になってしまったが、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』のセリフでバラ談義を終えることにしよう。「名が何であろうか。バラと呼ばれる花は、他の名がついても、同じに甘く香るのであるに。」麗しの愛の花、バラよ。

リンドウ（秋）

可憐な青い花をつけるリンドウの花は、日本では秋の季語である。わが国の山野では、この花は種類により六月から九月にかけて咲くが、ヨーロッパのリンドウは初夏から夏に咲くといわれ

る。イギリスのロマン派の詩人コールリッジは「氷河の数歩手前に、花のうちでいちばん綺麗な青色のリンドウがおびただしく咲いている」と歌っている。広義のリンドウといわれる花は世界に約六百種もあるといわれるが、ゲンチアナという学名の由来は、イリリアの国王ゲンチウスへの献名として、ネロ皇帝の軍医であったディオスコリデスによって命名されたということによる。リンドウの基本種ゲンチアナの根からとれる生薬は、解毒、強壮剤、ヒステリーにも効くとされている。とくに、ヨーロッパの山草愛好家の間では、オオバナリンドウ、アルプスリンドウ、ヨーロッパハルリンドウなどが栽培されている。花言葉は「ふさいでいるあなたが一番好き」である。

秋の花としてとくに、リンドウの花をとりあげたのは、私事に係わることである。一つには、私の実兄が昨年九月二十六日に六十歳で亡くなったのだが、植物分類学者である兄の研究対象となったのがリンドウの花であったという点である。兄は中学校の山岳部の登山で美しいミヤマリンドウに出会い、将来植物学者になるという決心をした。兄はまさにリンドウにほれこんだときえいえよう。彼が旭川から信州の穂高町に移り住んだのも、北アルプス連峰のそびえる長野県には、日本産リンドウの三分の二の二十四種が自生しているためでもあった。

つぎに、私の研究対象である作家 D. H. ロレンスが晩年に「バヴァリア・リンドウ」というすぐれた詩を書いているということである。いわば、リンドウは植物研究と文学研究という異なる分野を歩いてきた私たち兄弟をつなぐ一つの絆といえるかもしれない。兄が亡くなったいま、このように思うのは、私個人の勝手な思い込みかもしれないが、何か運命的なものさえ強く感じるのである。兄の死の床での「ぼくは写真でしかリンドウを見たことがない」という言葉は、数多くのリンドウを採集した兄の言葉として不可解である。それは苦しみのなかで、リンドウを見る前の少年時代にタイム・スリップした兄のうわ言かもしれない。しかし、それはリンドウを研究しつくした兄の謙虚な気持ちと私には思えるのだ。いかに学問的に研究しても、リンドウの花そのものは、そのリアリティは所有できないということではなかろうか。これこそまさにロレンスの生命主義の哲学や、「人間はいかにしても自然を征服できない」という自然観に結びつくといえよう。

D. H. ロレンスの死後 1932 年に出版された『最後の詩集』の中に「バヴァリア・リンドウ」がある。R. オールディントンはこの詩集の諸篇を「ロレンスの生涯の最後の一年の一種の日記」であるという。その中でも最も注目すべき作品が、この「バヴァリア・リンドウ」と「死の船」であり、ロレンスの後期の傑作『死んだ男』や『アポカリプス』の主題——永遠回帰の思想と復活の夢——へとつながってゆく。

バヴァリア・リンドウ

だれもが家にリンドウを持っているわけでない
おだやかな九月、ゆっくりした、悲しいミカエル祭に。

バヴァリア・リンドウ、大きくて暗く、ただ暗く
ブルートーの闇の青くけむる松明のように、昼を暗くし、
うね模様をなし、松明のような、暗闇の炎は青くひろがり

下の方へ平たくなって尖り、白日のもとに平たくなり
青くけむる暗闇の松明の花、プルートの暗青色の目くるめき、
デイスの神殿から照る黒いランプ、暗く青く燃えて、
暗黒、青い暗黒を放つ、デメーテルの青白いランプが光を放つとき、
されば、わたしを導き、案内せよ。

わたしにリンドウをとってくれ、わたしに松明をあたえよ！
この花の青い、二つに裂けた松明をもって、暗い暗い階段をだんだん下へ
わたしが行けるようにしてくれ、青が青さのうえに暗く重なるところへ。
ペルセポネーが丁度いま、霜おく九月から去って
闇が暗黒のうえで目ざめる見えない国へ行くのだ。
そしてペルセポネー自身はただ声だけになり、
またプルートの腕のより深い暗黒に抱かれた
見えない暗闇となる。暗闇の松明の輝きのあいだに、
失われた花嫁と花婿に暗黒をふりそそぐ、濃い暗闇の情熱に貫かれて。

この詩には、南フランスで静養しながら、刻々とせまりくる死を自覚したロレンスの姿が見られる。詩人は冥界の神プルートの松明のように暗青色に輝くリンドウの花をシンボルとして、静かに死を迎えようというかれ自身の勇気を歌っているといえる。自分の死を自覚しながら、最後まで生きる意思を失わなかった兄も、柩いっぱいに入れられた兄がこよなく愛したリンドウの花を松明にして、未知の世界へと歩いていったのではなかろうか。

この拙文は兄の追悼のために書かれたものである。リンドウに関しての説明は主として、兄の著書、山と溪谷社の『日本の高山植物』の「リンドウ科」から引用した。